

## 『太平記』の終焉：楠 正儀と細川頼之

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷垣, 伊太雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4727">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4727</a>

# 『太平記』の終焉

—楠 正儀と細川頼之—

谷 垣 伊 太 雄

一

貞治六年（正平二十二年・一三六七）「十二月七日子刻ニ、御年卅八」<sup>（注）</sup>で二代將軍足利義詮が死亡、土蔵の義満が後を嗣ぐ。そして、武蔵守に補任された細川頼之が執筆職を司って義満を補任することによって「外相内徳勝ニモ人ノ言ニ不違シカバ、氏族モ重シ之、外様モ彼ノ命ヲ不背シテ、中夏無為之代ニ成テ、日出度カリシ事共也」と締め括られるのが、『太平記』巻四十の巻末である。

義詮の將軍就任時から執事であった細川清氏が、康安元年（正平十六年・一三六一）九月に失脚し、空白期を置いて、翌年七月に斯波義將が執事（管領）となったものの、貞治五年八月に職を追われ、やはり空白期を置いて、細川頼之が貞治六年十一月二十五日に管領職に就いたのであったが、『太平記』は、それを義詮死亡記事の後に置くことによって、「中夏無為之代」の到来という寿詞による作品の完結を企図した。

細川頼之が『太平記』に初めて登場するのは、文和四年（正平十年・一三五五）二月の神南合戦（巻三十一）であり、次は、康安元年七月に美作へ進攻した山名時氏勢と対決しようとした赤松一族らが進退窮まって援軍を求める場面（巻三十六）である。ただ、「九月十日備前へ押渡」った頼之は、予想に反して味方の軍勢がふえなかつたため「徒ニ月日ヲソ送ラレケル」と記される。

異心を疑われて執事職を失脚し、南朝に降服した後、康安二年一月に四国に赴き「四国ヲ打平ケテ、今一度都ヲ傾ムト企」てる細川清氏を、「備前、備中、備後之勢千余騎ヲ卒シ讃岐国へ押渡」って「七月廿四日」に討った（巻三十八）のが細川頼之であった。この頼之の勝利を踏まえて、

今年天下已ニ同時ニ乱テ、宮方盾ヲ開キヌト見ヘケルカ、無<sub>レ</sub>程国々静リケルモ、天運之未<sub>レ</sub>到所トハ乍<sub>レ</sub>云、先ハ細川相模守カ楚忽之軍シテ、云甲斐ナク打死セシ故也

と要約した上で、更に中国故事を引用して、

今細川相模守双ナキ大力、世ニ超タル勇士ナリト聞シカトモ、  
細川右馬頭カ尺寸之謀ニ落サレテ、一日之間ニ亡ヒタル事、偏  
ニ宋朝幼帝々師カ謀ニ相似リ、人トシテ速キ慮リナキ時者必ス  
近キ愁アリトハ、如レ此ノ事ヲヤ可申

との結論が提示される(卷三十八・卷末)。

そして、先述した執事職就任の『太平記』卷末記事が頼之につい  
ての最終記述となるわけである。

## 二一

細川頼之の執事職就任に至る経緯については、『後太平記』<sup>(注)</sup>に詳  
しい叙述が見られる。

まず、「前執事尾張大夫入道道朝」(斯波高経)が「無道の奢侈に  
依て、忽ち権職を廢せられ、去る貞治四年に越前国へ」落ちたため、

源家の枝葉末統の中にて、智仁勇の三徳備り、礼儀正しく行  
跡直なる人を選びて、早く執事の職に補任せらるべき旨諫議

があったものの、「其器に当る人」がいなかったため「空しく三箇年迄」  
経過した。

「佐々木佐渡判官入道道誉を以て此職に居ゑらるべきに議定已に  
決定」したが、それを知った「関東管領左馬頭基氏朝臣」は、

凡そ天下の権柄を執るべき人は、智略万人に越えずして争か  
四海を掌握すべき、庸愚不肖の権勢何の益か候べき、当家の執  
事に於ては、一家の門葉宗徒の一族に非ずしては、此職を課せ

給はん事、政道の僻事たるべし  
として、

其故は、祖父左大臣尊氏卿の執事、累代恩流を呑んで忠臣た  
るべき高師直兄弟さへ奢強大にして、讒心深く、終に天下を擾  
乱す、況や他家の大名に於てをや、如何ぞ忠烈に心を傾くべき  
と先例を引いた上で、道誉については「奢り千人に越え讒心万人に  
超過せり、若し渠に権柄を授け給はば、天下の大変年を越ゆべから  
ず」と述べ、細川右馬頭頼之を「三徳兼備りて才智尚時代の風に  
応じ、謀慮執事の器に相当れる者也」と強く推挙し、そのことを伝え  
るための使者を京都へ送った。

義詮も「是の諫議尤も至極せり」と述べ、頼之を「執政の職に補  
し」た。しかし、頼之は、「某不肖の身にして斯る高職を勤めん事、  
且は世人の指笑に落され、且は天下荒廢の端たるべし」と述べ、更  
に、

殊更五畿七道未だ治らずして、半ば南方の王威に傾き、半は  
武家の権勢に随ひ、世は二弓二裂の巷に漂ふ折節、政道一塵も  
誤るときは、南方の官軍忽ち衰虚に乗じ、八敵反覆の患ひ俄然  
と来るべし、是れ御代傾廢の基たるべし

と現状分析をし、「願くは寛仁広徳英才雄智の人を以て、此職に居  
ゑらるべし」と固辞して四国に下ってしまった。

ところが、「貞治六年九月半より」義詮が「例ならず、寢席に膏  
き、天行の疾に侵され」、「御形容日々に衰へ」、「天下の良医」の治  
療も、「有驗の高僧」の祈りも、「諸社の奉幣」も効果がなかった。

「諸国の官軍蜂起の謀やあらん」と懸念される中、「安危唯是れ執事の職に留りぬ」との声が高まり、大内弘世・佐々木高秀・佐々木崇永・赤松光範・一色詮範・土岐善忠・山名時氏や「其外仁木、武田を初めとして」それぞれが「諫文を捧げ」、細川頼之の執事就任への要望が強くなったため、四国へ急使が派遣され、頼之は上洛した。將軍義詮は頼之を病室に呼び、「病患千が一も本復すべき病にあらず」と語り、

吾逝きて後は、御辺が智謀に任せて天下の権柄を執り、春王義満を守立て、三代將軍の位に備へて給へよかし（中略）若し八敵退き天下泰平の功を尽さば、御辺が忠烈、冥途黄泉の草陰苔の下迄も、如何程か嬉しかるべき

と、涙を浮かべて懇請したため、「一座の人々、傍の上臈に至る迄、皆泪を促し、哀悼の袖」を濡らした。そして、頼之も「今は辞するに所なく、唯泪を命せの驗として」承引した。

頼之が「仁義礼智の四徳信を尽し」た結果、大名高家は「親附して式なく、忠良の志」は「前代に越え」た。又、「賦斂徭役明かに沙汰し、貧賤孤独を憐み、慈仁の心厚く、執政一行も誤り」がなかったので、

万民無為の化を築み、天下益太平に属し、義満朝臣の御威光終に四海を優し、諸国与力の御方日々に馳集って蟻附し、南方の官軍は自然に衰へ、威を失ふ事、喩へば満月天に輝き、万星光を減ずるに異ならずという状況を招来した。

「貪慾」を禁じ、「法制」を重んじ、「佞媚」を禁ずる「御制法三箇条」（応安元年二月二日）を制定した頼之については、

神武叡智にして、治乱の源を探って、万里無塵の治制、智謀万侯に越えたりと、世の人舌を翻し感讚せずと云ふ事なしとの評言が記される。「佞人讒者」を制圧するために、頼之は「患を以て悪を除かん計」として「佞坊と名付けて法師六人を作り、太刀刀衣類異形の装束を着せて、種々の悪業を作らせ」た。このように「幼將軍を守り立つる執事武蔵守頼之の智謀材智」について、反復する形で「神武叡智にも越えたりと、之を感せずといふことなし」と描かれる。

## 二

ところで、楠正行が「己ニ廿五、今年ハ殊更父カ十三年之遠忌ニ当」るとして挙兵したのは、貞和三年（正平二年・一三四七）のことであった（巻二十六<sup>（注）</sup>）。そして、正行は翌年一月五日、高師直軍と対決した四条畷合戦で、弟正時とともに討死する。右の記述に従えば正行の死は二十六歳ということになるが、父正成と桜井宿で別れた建武三年（延元元年・一三三三）に「十一歳」（巻十六）とあったので、二十三歳で討死したことになる。

正行の弟・楠正儀は、

貞和五年正月五日之四條繩手之合戦ニ、和田楠カ一類皆亡テ、今ハ正行カ舎弟次郎左衛門正儀ハカリ生テ残リタリト聞シカハ、

此次ニ残所ナク退治セラルヘシトテ、高越後守師泰、三千余騎ニテ石河々原ニ向城ヲトリ、互ニ寄ツ寄ラレツ、合戦之止隙ナシ

という場面(巻二十七)に、初めて登場する。

観応三年(正平七年・一三五二)三月二十四日の八幡合戦(巻三十一)に「和田五郎与楠次郎左衛門ヲ向ラレケルカ、楠ハ今年廿三、和田五郎ハ十六」と記されるので、兄正行が討死した時、正儀は十九歳だったことになり、何故、兄とともに出陣しなかったのかというような疑問を残しつつも、物語としての『太平記』は、正行の後に登場する楠氏の一人として、正儀を描き続けていくこととなる。

右に引用した場面は次のように続く。

楠ハ今年廿三、和田五郎ハ十六、何モ皆若武者ナレハ、思慮ナキ合戦ヲヤ致スラント、諸卿悉ク危ミ思ハレケルニ、和田五郎參内シテ申ケルハ、親類兄弟悉ク度々之合戦ニ身ヲ捨テ打死候畢、今日之合戦又公私之一大事ト存スル事ニテ候上者、命ヲキハノ合戦仕テ、敵之大将ヲ一人打取候ハスハ、再ヒ御前ヘ帰り參ル事候マシト申切テ罷出ケレハ、列坐之諸卿国々之兵、アハレ代々之勇士ヤト、先感セヌハ無リケリ

つまり、かつて、吉野の皇居に参向して、

今度師直師泰ニ対シテ身命ヲ尽ス合戦ヲ仕テ、彼等カ頭ヲ正行カ手ニカケテ取候歟、正行正時カ首ヲ彼等ニトラレ候歟、其

二ノ中ニ戦ノ雌雄ヲ可レ決  
と、後村上天皇に奏上した「楠帯刀正行」の役割(巻二十六)を、

ここでは、十六歳の和田五郎が担っている。

そして、戦況の推移の中で、

角テハイツマテカ俵ウヘキ、和田楠ヲ河内国ヘ返シテ、後攻セサセヨトテ、彼等兩人ヲ忍テ城ヨリ出シ、河内国ヘソ遣サレケル、八幡ニハ此後攻ヲ憑テ、今ヤ々々ト待給フ処ニ、是ヲ我一大事ト思入レテ引立タル和田五郎儀ニ病出シテ、幾程モナク死ニケリ

と、和田五郎の急死が語られ、楠正儀の方は、

楠ハ父ニモ似ス、兄ニモカハリテ、心スコシ延タル物也ケレハ、今日ヨ明日ト云計ニテ、主上ノ大敵ニ困レテヲハスルカ、イカ、ハセン共、心ニ懸サリケルコソ憂タテケレ、堯ノ子堯ナラス、舜之子舜ニ似ストハ云ナカラ、此楠ハ正成カ子ナリ、正行カ弟也、何ノ程ニカ親ニカハリ、兄ニ是マテヲトルラントシ誘ラヌ人モ無リケリ  
と、批判的に描かれる。

延文四年(正平十四年・一三五九)年末、後村上天皇の「河内之天野」の皇居に参上した「楠左馬頭正儀、和田和泉守正氏」が、「天之時」「地之利」「人之和」という「三之謀」を述べ、観心寺への遷幸を薦めた結果、「主上ヲ始メ」「月卿雲客ニ至ルマテ、皆憑シケニ」思い、遷幸が実現するという場面(巻三十四)では、肯定的に描かれるものの、後に、足利軍が赤坂城を攻める場面では、

楠ハ元來思慮深ニ似テ、急ニ敵ニ当ル氣ヲ進マサリケレハ、此大敵ニ戦ハン事難ク叶、只金剛山ニ引籠テ、敵ノ勢ノ透タル

処ヲ見テ後ニ戦ハント申ケル

と描かれ、「何モ戦ヲ先トシテ謀ヲ待メ者」と記される和田が正義の意見に賛同せず、「サテモ天下ノ敵ニ受タル南方之者共カ、遂ニ野臥計ニテ一軍モセスト、日本国ノ武士共ニ笑レン事コソ口惜ケレ」と主張して「夜討ニ馴タル兵三百人」を選抜して奮戦する叙述とは対照的な造形を見せる。

康安元年（正平十六年・一三六一）の摂津合戦で、和田・楠軍が佐々木秀詮兄弟を討死させた場面（卷三十六）では、

楠情ケ有物ナレハ、或ハ野伏共ニ虜レテ、面縛セラレタル敵ヲモ不<sub>レ</sub>斬、或ハ自<sub>レ</sub>河引上ラレテ、カヒナキ命生タル敵ヲモイマシメヲカス、赤裸ナル物ニハ小袖ヲキセ、手負タル物ニハ薬ヲ与ヘテ、京ヘソ返シ遣シケル

と語られるが、これは、

安部野之合戦者、霜月廿六日之事ナレハ、渡辺橋ヨリ閑落サレテ、流ル、兵五百余人、無甲斐命ヲ楠ニ助ラレテ、自<sub>レ</sub>河引上ラレタリケレ共、秋ノ霜肉ヲ破リ、暁ノ氷膚ニ結テ、生ヘシトモミヘサリケルヲ、楠情有物也ケレハ、小袖ヲ抜カヘサセテ身ヲ暖メ、薬ヲ与ヘテ疵ヲ療治セシム、四五日皆勞リテ、馬ヲ引、物具ヲ失タル人ニハ具足ヲキセ、色代シテソ送りケルと描かれた正行像（卷二十六）と相似型と言える。

南朝に降服した細川清氏が、後村上天皇に京都への進攻を提言した（卷三十六）<sup>（40）</sup>際に、意見を求められた正儀は、「暫ク思案シテ」、「故尊氏卿正月六日ノ合戦ニ打負テ」と建武三年の先例を引いた上

で、

今モ都ヲ責落シ候ハンスル事ハ、清氏カ力ヲ借ルマテモ候マシ、正儀一人カ勢ヲ以テモ容易カルヘキニテ候ヘ共、亦敵ニ取テ返サレテ責ラレ候ハン時、何ノ国カ官軍之助ト成候ヘキ、若退ク事ヲ恥テ洛中ニテ戦候ハ、四国西国ノ御敵共、兵船ヲ浮ヘテ跡ヲオソヒ、美濃、尾張、越前、加賀之朝敵共、宇治、勢田ヨリ押寄テ戦ヲ決シ候ハン歟、去程ナラハ天下ヲ朝敵ニ奪レン事、掌ノ中ニアリヌト覚ヘ候、但シ短才之愚案ニテ、公儀ヲ編シ可<sub>レ</sub>申ニ候ハネハ、兎モ角モ綸言ニ順候ヘシ

と控え目に発言する。結局、「主上ヲ始マイラセテ、竹園椒房、諸司諸衛ニ至マテ、住ナレシ都ノ恋シサ」ゆえに、京都進攻を認め、康安元年十二月、南朝軍は都へ攻め入る。

十二月八日、將軍義詮は近江へと落ちたが、その際、佐々木道誉は「我宿所へハ定テサモトアル大将ソ入カハランスラン、尋常ニ取シタ、メテ見スヘシ」として、

六間之会所六所ニ大文之置ヲ敷双ヘ、本尊脇ノ絵、花瓶、香炉、鐘子、建盞ニ至ルマテ、一樣ニ皆置調ヘテ、書院ニハ義之カ草書之偈、韓愈カ文集、眠藏ニハ沈之枕ニ曇子之宿直物、十二間之遠侍ニハ鳥、兎、雉、白鳥、三棹ニ懸双ヘ、三石入計ナル大筒ニ酒ヲ湛ヘ

という豪華な用意をした上で、「遁世物一人留置テ、誰ニテモ此宿所ヘ入ランスル人ニ、一献勸メヨ」と指示しておいた。

「一番ニ打入」った楠に、遁世者が「誰ニテモ此弊屋へ御入候ハ

ンスル人ニ、一献ヲ勸メ申セト道誉禪門申置レテ候」と挨拶をして出迎えた。「道誉ハ相模守カ当敵ナレハ」清氏は「此宿所ヲハコホチ焼ヘシト憤」ったが、楠は「此情ヲ感シテ其義ヲ止メ」たため、「泉水ノ木ノ一本ヲモ損セス、畳ノ一帖モ取散」らさなかつた。「其後幾程無シテ」楠は都を落ちる際に、「六所之飾リ遠侍ノ酒肴」を「先ノヨリモ結構シ、眠藏ニハ秘藏之鏝ニ白太刀一振」を置き、「郎等二人」を留め置いて「判官人道々誉ニ交替シ」たのであつた。この場面については、

道誉カ此振舞、情深ク風情有ト感スル人モアリ、例之古博奕打ニ出拔レテ、楠鏝与太刀ヲ取ラレタリト笑フ族モ多カリケルと戲画的に描写されている（卷三十一）。

やがて、七月二十四日に細川清氏が四国で細川頼之に討たれた康安二年（正平十七年・一二六〇）の九月十六日、「石堂石馬頭、和田、楠」は、「三千余騎ニテ、兵庫湊河へ押ヨセ、一字モ不殘焼払」ったのに対し、赤松光範・範実兄弟が「夕、部、山路ニテ所之城ニ籠テ、敵懸ラハ愛ニテ利ヲセムト待懸」けていたところ、楠が「如何思ケン、懸テ兵庫ヨリ引返シ」たため、赤松は「野伏少々城ヨリ出シテ、遠矢ニ射懸」けただけで「ハカハカシキ軍ハ無」かつた。都では「同九月晦日改元有テ貞治」となつたが、これは「南方之蜂起サテモヤシツマル」と考へての改元であつた。「ケニモ改元之シルシニヤ、京都ヨリ武家之執事尾張大夫入道大勢ヲ打手ニ下スト聞ヘ」たことで「和田楠亦尼崎西宮ノ陣ヲ引テ河内国へ帰」つた。これを聞いて、山名時氏勢も因幡国へ引き返してしまつた。この記

述に続くのが、第一章に引用した「今年天下……」の清氏批判の文章である。

#### 四

『太平記』作者にとつて、楠正儀は正成とも正行とも異なる、しかし確実に楠氏の「三人目」であつた。「一人目」の正行は、直接伝えられた父の「庭訓」を、父の死後に母の口から「父ノ遺訓母ノ教訓」という増幅された言葉のメッセージとして背負い、「朝敵」を攻撃の目標とした。しかし、現実には足利尊氏・直義ではなく、結局は高師直・師泰を相手とし、しかも勝つことはできずに討死してしまふ。

その後登場する正儀は、親とも兄とも直接の関わりが語られない存在でありながら、〈正成の子、正行の弟〉という装束を着せられて、『太平記』の終幕まで出演し続けることとなる。

ただ、その登場場面は、父や兄の時代とは大きく異なる状況となつていた。そのため、正儀は、時には、天・地・人という三つの視点から展望して作戦を進言するような正成的側面を見せたり（卷三十四）、情け深いというような正行的側面を見せたり（卷三十六）しつつも、同族の和田五郎や和田正氏らとの対比によって、〈俊敏な行動〉よりも〈熟慮する〉人物として形象化されることとなる。

それは、場合によっては、「心スコシ延タル物」として「何ノ程ニカ親ニカハリ兄ニ是マテヲトルラン」と人から誇られたり（卷二

十六)、「思慮深ニ似テ、急ニ敵ニ当ル氣ヲ進マサリケレハ」と、その思考姿勢が否定的に描かれたり(卷三十四)もする。

この正儀が作品の中で最後に登場するのは、康安二年(正平十七年・一三六二)九月の出陣場面である。正儀達が進攻したのは「兵庫湊河」であった。そこは、かつて父正成が七百余騎で足利直義を追いつめながら討ち果たせず、七十余騎となり、弟正氏と「兄弟手ニ手ヲ取組、指違テ同枕ニ」最期を遂げた(卷十六)場所である。しかし、作者は、その事に言及はせず、正儀にも、そのような回想をさせることはない。そして、「楠如何思ケン」という、説明さえもない不明確な形で、正儀を兵庫から退去させてしまう(卷三十八)。

ところで、現実の正儀は、『太平記』が描かなかつた別の顔を持っていた。それは、「南朝和平派のリーダー」という顔であった。森茂暁氏は、後村上天皇の時代二十九年間における南北朝和睦のための「史料的に確認できる和議の例」四回を採り上げて、正平二十二年(貞治六年・一三六七)の第四回日に関して、次のように述べておられる。

この年の四月二十九日、南朝の勅使葉室光資が將軍足利義詮のもとを訪れた(『師守記』)。同年五月九日には、光資は再び義詮と対面して南朝側の講和条件を伝えたが、武家側のいれるところとはならず、結局和談は破れた(『後愚昧記』)。破談の直接的理由は、武家にもたらされた後村上天皇論旨に「降参」の文字(武家が降伏するという意味)が使用されていたので、義

詮が立腹したからだとされている。(中略)

貞治六年の和議では、和睦交渉の推進者として南朝側の楠木正儀、武家側の佐々木導誓の介在と尽力も見落とすことができない。交渉がかなり進捗したのも、彼らの尽力によるところが大きかった。正儀は南朝の和平派のリーダーだったと考えられる。このため、和議の決裂は南朝における正儀の立場を失わせたい。正儀が康安二年(正平二四、一三六九)正月、南朝を去り武家に帰順したのはそのような理由によると考えられている。

又、『太平記』巻末に連接する時期の正儀の動静について、たとえば『花宮三代記』に、以下のような記述が見られる。

康安二年(一三六九)条。

正月二日「楠木左兵衛督依可參御方之由申之。被成御教書一畢。」

二月七日「楠木參御方之由。令相触和泉河内兩國。」

三月十六日「為楠木合力赤松大夫判官入道等差向南方。」

同十八日「細川右馬助以下為同合力差向南方。」

同二十日「楠木引退天王寺之由申之。」

同二十三日「同引退榎並之由申之。赤松大夫判官入道自天

王寺同引退。」

四月二日「楠木左兵衛督上洛。」

同三日「楠木御所御対面。」

同二十二日「楠木下向河州十七箇所。」



つまり、楠正儀は、正月に幕府（北朝）方になることを決め、それを許容した幕府も、正儀を援けるために、赤松光範や細川頼基を派遣。四月二日に上洛した正儀は、まず管領細川頼之と対面し、翌日には將軍義満に対面を果たした。

正平二十三年（一三六八）三月十一日に崩御した後村上天皇のあとをうけて踐祚した長慶天皇について、新田一郎氏は、

後村上天皇の晩年にはたびたび試みられていた和睦交渉が、長慶天皇の代にはまったく形跡をとどめていないことや、後村上天皇のもとでたびたび和睦交渉の場に臨んでいた南朝重臣楠木正儀が、正平二十四年には南朝方を離れて足利方に投降していることの背景に、長慶天皇の厳しい姿勢を想定することができると述べておられる。

考えてみれば、『太平記』卷三十八に戯画的に描かれていた「情」（風流）をめぐっての佐々木道誉と楠正儀との話も、南北朝の和睦交渉に関わっていく二人にとっての伏線の出合いとも言えようし、「楠木正儀の誘降と伊勢・河内南軍の圧迫、今川了後の鎮西管領起用と発遣など幕府権力の拡充と全国制覇の実現をめざす施策をつぎつぎと打ち出した」とされる細川頼之と正儀とは、『花宮三代記』が記すように直接対面もしたわけである。

結局、「天徳」を身に備えた「明君」と、「地道」に従う「良臣」とを一つの理想として、動乱の時代とそこに生きる人間とを描いてきた『太平記』作者にとって、正儀の現実的な生き方は、理解・説

明の枠を越えるものであった。そのため、正儀の「思慮」深さの内面に沈潜する現実認識ゆえの苦悶を描き得ず、正成や正行と比べて、批判の対象とせざるをえなかった。

一方、長期政権を継続させて、南北朝合一を現出させることとなる義満の將軍就任と、「双ナキ大力、世ニ超タル勇士」でありながら「遠キ慮リナキ」ゆえに滅亡した（卷三十八）細川清氏とは対照的に、『後太平記』が重層的に賛美する細川頼之という賢佐が、義満を補佐する存在として登場した時こそは、『太平記』が序文で考えていたのとは異なるものでありながら、「明君」と「良臣」との登場による、一つの「太平」的完結であったとは言えよう。

そして、統一のとれた人物像としては描ききれない楠正儀を、それでもなお登場させ続け、一方、比較的完結する形で抽出しやすい細川頼之を物語の最後に配置したところに、善し悪しは別として、文学としての『太平記』の幅を見ることができ、そこに、さまざまな故事・説話を導入して点綴しつつ作品を立体的に完成しようとした作者の苦悶を窺うこともできる。

(注)  
(注1) 引用は『西源院本太平記』（刀江書院）により、字体を改めた。

(注2) 引用は『通俗日本全史 後太平記』（早稲田大学出版部）により、字体を改めた。

(注3) 執事は道朝の子息義将。引用文中の「貞治四年」は、『太

平記』・史実とも「貞治五年」(ただし、古活字本『太平記』は、この箇所のみ「貞治四年八月四日」と記す)。

(注4) 古活字本(日本古典文学大系・岩波書店)は巻二十五。正行の死は巻二十六。『太平記』は文脈上、貞和四年の挙兵となる。

(注5) 西源院本・巻二十六でも、正成の死について「遂ニ撰州湊川ニシテ打死仕候畢ヌ、其時止行十一歳ニ成候シ」とある。  
(注6) 文中の「貞和五年」は、史実としては「貞和四年」。古活字本は巻二十六。

(注7) 天正本(新編日本古典文学全集・小学館)は「二十二」。

(注8) 天正本では「軍の習ひ、兵の多少にはよらぬ事にて候ふ。亡父正成も毎度小勢を以て大敵を拉ぎ候ひき。その謂れは、ただ智謀・武略の故にて候ふ」等の正儀の発言を記す。

(注9) 古活字本は巻三十七。

(注10) 古活字本は巻三十七。

(注11) 森茂暁『南朝全史(附註)』(講談社)による。

(注12) 注11と同じ。引用に際し、よみがなを省いた。なお、森氏は御著書『佐々木導誉』(人物叢書・吉川弘文館)においても「導誉」の表記を採用されているので、それに従う。

(注13) 群書類従本により、字体を改めた。

(注14) 引用に際し、時刻等は省き、必要記事のみを字体を改めて「」内に記した。

(注15) 米田雄介編『歴代天皇年号事典』(吉川弘文館)には、長

慶天皇の踐祚は「正平二十三年(北朝応安元、一三二八)三月十一日後村上天皇の崩御直後か、あるいはその崩御をさかのぼる若干年前か確認しがたい」と記されている。

(注16) 『日本の歴史11 太平記の時代』(講談社)による。

(注17) 『國史大辞典』(吉川弘文館)の「細川頼之」の項(小川信氏執筆)。

(注18) 『太平記』巻一の冒頭文(古活字本等では「序」とする)にある。

(注19) やがて、正儀は、永徳二年(弘和二年・一三三二)に南朝に帰順する。

(追記) 本稿は、平成17年2月19日(土)に本学で催された「第10回文学・文化フォーラム」において、「平家物語から太平記へ」というテーマで、山下宏明名古屋大学名誉教授の「琵琶法師の平家物語」に続いて、私が「楠父子の太平記」と題して講演させていただいた際の原稿に基づきつつ、楠正成のことは省き、細川頼之のことを追加してまとめたものである。

